

巡礼の年  
リストと旅した伯爵夫人の日記

マリー・ダグー著  
近藤 朱蔵 訳

青山ライフ出版

MÉMOIRES, SOUVENIRS ET JOURNAUX DE LA COMTESSE D'AGOULT

Présentation et notes de Charles DUPÉCHEZ

©Editions Mercure de France, 2007

This book is published in Japan by arrangement with MERCURE DE FRANCE,  
through le Bureau des Copyrights Français, Tokyo.

## はじめに

本書は *Mémoires, souvenirs et journaux de la comtesse d'Agout, présentation et notes de Charles F. Dupêchez, nouvelles édition augmentée et corrigée*, Mercure de France, 2007 (『ダグー伯爵夫人の回想、想い出と日記』シャルル・F・デュペシェの注釈と紹介、増補改訂新版、メルキュール・ド・フランス、二〇〇七年)の ANNEXES の部分(四四七頁から七二二頁)とその注釈を翻訳したものである。ただし「マリー・ダグー小伝」と題した一文は原著七頁と八頁の NOTICE BIOGRAPHIQUE を訳したものである。ANNEXES は「付録、補遺、参考資料」といった意味であるが、内容的にはおもにマリー・ダグーがリストとともに旅をしていた時期の日記なので、本体部分の「回想録」(または「自伝」とはもともと異なった性格のものであり、ANNEXES だけで独立した一書をなしても不思議はない。なお本体部分も今後翻訳、出版の予定がある。

原著はもともと二巻本だった。 *Mémoires, Souvenirs et Journaux de la comtesse d'Agout (Daniel Stern), présentation et notes de Charles F. Dupêchez*, I, II, (Mercure de France, 1990) じやうが「旧版」になせ。一卷本になるときに削られた注釈が参考になる場合は旧版の注も載せておいた。

注釈は段落毎に掲載してあるが、原著の注だけでは日本の読者にとって分かりにくいところや、出典が判

明した場合などは訳注を追加した。特にことわりがなければ原著の注釈の訳、訳者による注の場合は「訳注」と断つてある。原著の注釈にさらに訳注を加えた場合は (a), (b), (c) … 等と表示した。一般的な辞書類からの引用は特に断っていないことも多いが、それ以外で頻繁に引用されるものは以下の通り。

① Marie de Flavigny, comtesse d'Agoutt, *Correspondance générale Tome 1 : 1821-1836*, Champion, 2003.  
*Correspondance générale Tome Ⅱ : 1837-octobre 1839*, Champion, 2004.

*Correspondance générale Tome Ⅲ : novembre 1839-1841*, Champion, 2005.

(校訂と注釈は全て本書と同じくデュペンシエ氏による)

『書簡全集』第一巻等と略記する。

『書簡全集』第一巻の付録には AGENDA 1835, AGENDA 1836 がある。リストとマリー・ダグー二人で書いたごく簡単な日々の記録である。『備忘録』と略記する。マリーとフランスが何時どこで何をしたかは、実は『日記』よりこちらの方が分かりやすい。

『書簡全集』は正確には往復書簡全集なのだが、肝心のリストからの書簡は内容の要約のみが載せられている。リストからマリー・ダグー宛の書簡は次の書簡集がいわば「独占」しているのが現状である。

② Franz Liszt, Marie d'Agoutt, *Correspondance*, Nouvelle édition revue, augmentée et annotée par Serge Gut et Jacqueline Bellas, Fayard, 2001

じゅしやいを 『往復書簡集』と呼ぶ。

③ *Lettres d'un Bachelier es musique* (Franz Liszt, *Artiste et Société*, Flammarion, 1995 所収)

『音楽バシユリエの書簡集』は『ガゼット・ミュージカル』等に発表された書簡形式の旅行記もしくはエッセ

イ。リストの著作集 *Artiste et Société* (『芸術家と社会』) に収められているが、実質的にはマリーとリストの共著といつてよいものである。

その他

原稿で下線が引かれていた部分は、書籍化に際してイタリック体で表されたが、本書では「        」で示した。綴りの誤り等をそのままにしたことを示す sic は「ママ」としたが、日本語で誤りを模倣した場合も、しなかつた場合もある。

原文を編集者が補っている場合、F. 「fanz」はフ「ランツ」などと表わした。

\* はマリー・ダグー自身がつけた注釈である。



## マリー・ダグー小伝

マリー・ソフィー・カトリーヌ・ド・フラヴィニーはフランクフルト・アン・マインで、一八〇五年十二月三十一日午前四時に（本人が書いているように真夜中ではない）生まれた。アレクサンドル・ド・フラヴィニー子爵とその妻であるマリー・エリザベート・ベトマンという裕福な銀行家の娘との間に生まれた、第三子である。フランクフルトでは相当裕福な暮らしの中で育った。その後一八〇九年からはフランスに移り、パリとトゥール近郊にあるモルティエ城に住んだ。二度フランクフルトに戻り、母方の家庭に長期間滞在した。一八一五年ナポレオンの百日天下に際してと父の死後一八二〇年のことだった。一八二七年五月十六日、マリーは退役大佐シャルル・ルイ・コンスタンス・ダグー伯爵とパリで盛大な結婚式を挙げる。二人の間には娘が二人生まれる。ルイーズ（一八二八年）とクレール（一八三〇年）である。しかしマリーは夫とはほとんど気持ちを通じない。

心を悩ませる憂鬱から逃れようとして、マリーは最初のサロンを開く。サン＝ジェルマン街にあるル・ヴェイイ侯爵夫人邸で、マリーが作曲家兼名ピアニストのフランツ・リストと出会ったのは一八三二年十二月のことだった。リストの方が六歳年下だった。しばらくして二人の秘密の関係が始まった。少し前に長女を失っ

たばかりだったが、妊娠した伯爵夫人は一八三五年五月二十八日、フランスを去りバーゼルに向かうことを決める。リストが合流する。二人はジュネーヴで一年を過ごし、その地で娘ブランディーヌが生まれる。それからパリに戻り、数週間ジョルジュ・サンドと共同でサロンを開く。その後一八三七年の初頭数ヶ月間はノアンに移って、この女流小説家、すなわちサンドのもとに身を寄せる。夏がやって来ると、マリーはフランス・リストとともにイタリアへ出発する。一八三九年までイタリア滞在は続く。ベラツジョ、ミラノ、ヴェネツィア、ジェノヴァ、ルガーノ、フィレンツェ、ローマ、ピサ等と次々居を移す。さらに二子が誕生する。一八三七年にコジマ、一八三九年にダニエル。

再びパリに落ち着いて、少しずつ家族とも和解するようになり、家族からは財政的援助を確約してもらった。マリーは常にリストの公式の愛人であり、サロンを開けば、広範な教養を活かしてフランス及び外国のあらゆる種類の芸術家、小説家、哲学者、画家、音楽家を受け入れることができた。マリーはダニエル・シュテルン(1)という名前で『ラ・プレス』誌に記事を発表し始める。リストはというと、大規模なヨーロッパツアーを行い、伯爵夫人とは非常に活発な文通を続ける。時折マリーはリストとどこかの街で落ち合ったり、ライオン川に浮かぶノネンヴェルト島で二夏(一八四一年と一八四三年)を共に過ごす。しかし二人の口論はますます激しさを増し、一八四四年五月には別れるしかなくなる。別れは辛かったが、子供たちが最大の犠牲者だった。親からはほとんど見捨てられたも同然で、父方の祖母(2)に預けられていたのだった。

(1) 訳注：シュテルン Stern はドイツ語で「星」という意味。フランス語読みをすると「ステルン」となるが、日本語としての語感のよさからドイツ語読みの「シュテルン」という読みを選んだ。

(2) 訳注：リストの母アンナ・リストのこと。

ダグー伯爵夫人は相変わらず言い寄られることが多かったが、これ以降は文筆活動に専念する。多数の書籍やパンフレットを刊行したが、その中には唯一の長編小説である『ネリダ』（一八四六年）、『自由論』（一八四七年）、『道徳的政治的素描』（一八四九年）、その再版である『思索、省察、箴言』、『一八四八年の革命史』（三巻本、一八五一年から一八五三年）、『メアリー・スチュアートの人生の三日間』と『ジャンヌ・ダルク』（一八五七年）という劇作二本、『フィレンツェとトリノ』（一八六二）と『ダンテとゲーテ』、そして最後に『オランダ共和国の草創期』（一八七二年）が含まれている。回想録は死後二巻本で刊行された。（一八七七年と一九二七年）。数多くの雑誌に寄稿したが、特に『両世界評論』『ラ・リベルテ』、『ル・シエクル』、『ル・タン』。そこに中編小説、小喜劇、詩、政治的考察などを発表した。一八四八年の革命の当時、マリーは共和主義の理想のために闘った。第二帝政ではマリーのサロンは特に政治的になり、穏健な野党の名士が集まった。最後にニース、ユラ山脈、ドゥー・セーヴルに長期間滞在した。たびたび外国旅行をした。ドイツ、イギリス、スペイン、ベルギー、オランダである。

若い頃から鬱病の発症に苦しんで、ルイズ（一八三四年）、ダニエル（一八五九年）、ブランディーヌ（一八六二年）という三人の子供の早生に動揺し、マリーは一八七六年三月五日、パリでどちらかというところ貧困のうちに亡くなった。娘のクレールはの・ド・ソーという名前の作家となり、シャルナセ伯爵及び侯爵ギーと結婚した。もう一人の娘コジマは指揮者ハンス・フォン・ビューローと離婚した後で作曲家リヒャルト・ワーグナーと再婚した。

## 目次

はじめに	3
マリー・ダグー小伝	7
スイス旅行 <i>Le Voyage en Suisse</i>	13
日記 (一八三七年～一八三九年) <i>Journal(1837-1839)</i>	81
アルバムの頁 リストが書いたもの <i>Feuillets d'Album, écrits par Liszt</i>	269

子供の日記	エチユード	Journal d'un Enfant - Etude	.....	281
ヴェネツィアの一挿話	Episode de Venise	.....	309	
パルマ	Palma	.....	325	
僧房よりの手紙	Lettres écrites d'une Cellule	.....	335	
あとがき	.....	.....	400	



# スイス旅行

Le Voyage en Suisse

## 編者のはしがき

以下の頁でダグー伯爵夫人が物語るのは、一八三五年にダグー伯爵と別れた後、パリを出奔し、バーゼルで母と話し合い、リストと共に旅して、ジュネーヴに落ち着くまでの経緯である。

初版『回想、想い出と日記』に用いられているテキストはクレール・ド・シャルナセ(1)の写しに基づいているが、かなりの部分がクレールによって削除されている。その写しは赤いノートに書かれていて、そのノートは一九六五年フェリシアーノ・ド・オリヴェイラ氏によってヴェルサイユ市立図書館に委託された。

(1) 訳注…クレール・ド・シャルナセはマリー・ダグーとダグー伯爵との間に生まれた、次女クレール・クリスチヌ・ダグー(一八三〇～一九二二)のこと。一八四九年シャルナセ伯爵(後に侯爵)と結婚した。

さてその後、元の原稿がシャルナセ古文書の中に見つかった。ここに初めて公刊するのはそのテキストである。

その重要性を強調する必要があるだろうか？そこには恋人たちが生活をともに始めた頃のこと事細かに語られている。恋人たちの小旅行については、リストの手帳のおかげでやっと路程が知られているにすぎなかった。その手帳はフランス国立図書館に託されているが、私たちはそれをダグー伯爵夫人の『書簡全集』第一巻中に発表した。

伯爵夫人はおそらく以下の頁をジュネーヴに居を定めた後大急ぎで認めたのだろう。とにかく一八三九年

十月にリストと別居状態になるよりはるか以前であろう。恋人に対して用いられている言葉の調子がそれを示している。

このテキストを先行する部分(1)と統一するため、綴りを現代化した。

(1)訳注：「先行する部分」とはマリーダグーの『回想と想い出』すなわち、回想録の部分を指している。

義理の兄(1)とともにほぼ四日間旅をして、五月三十一日日曜に私はバーゼルに着いた。この兄は生涯で知ることには最小ながら最大の愛を感じた人たちの一人である。私が結婚してからはお互いにならぬ他人のようになつていたが、それでも綾なす運命の糸を織りあげた深刻な出来事にもかかわらず、二人ともに憂愁と優しさに満ちた思いを抱いていた。それはある儂い時代のもので、その頃兄の心は成熟してはいても経験によつて枯れてはいず、魂が率直に吐露するものを受けとめ、それを朝の香気のように味わつていた。そしてその魂はわれしらず苦しみ、前もつて避けがたい未来を漠然と予感していただつた。

(1)ヨハン・アウグスト・エールマンのこと。ヨハン・ダニエル・エールマンとルイーゼ・ザロメ・トライトリンガールの息子。一七八六年三月十五日にストラスブルに生まれ、一八七六年八月二十日ドナウシンゲンで亡くなった。アルザスのプロテスタントの名家出身で、ヨハンはダグー伯爵夫人の異父姉妹アウグスタ・ブスマンと一八一七年四月十二日にパリで宗教上の結婚式を挙げた。アウグスタはマリーの母が銀行家ヨハン・ヤコブ・ベトマンとの最初の結婚でもうけた娘だつた。アウグスタ・ブスマンは一八〇七年に詩人クレメンス・ブレンターノと離婚してゐた。アウグスト・エールマンは一八二四年から一八三七年までベトマン銀行の共同経営者であり、たいへん裕福だつたが、息子が二人とも子供を残さず自分より先に亡くなつてしまつた。そのため、一五一万一千フランという莫大な金額をストラスブルの病院及び教育施設に遺贈した。

それ以来絶え間のない不幸が胸を締めつける。まるで鉛の衣が絶えず思考を歪め、最も内奥の感情を窒息させるような感じがした。その不幸に対して私は哀れみも同情も償いも求めないが、その不幸のせいで、以前は情愛と思いを交感しあつて生きていた人たちが全てから切り離されてしまつた。涙がこの身勝手な苦しみを和らげることはなく、心は干上がつてしまつた。たしかにまだ幾ばくかの過去の思い出は、すなわち青春

と詩の残骸はいくらが残っていた。しかしこの思い出にはもはや生命がなく、石化する山に花が残した、あの冷たい痕跡に似ていた。この興味深い現象に大多数の人々はほとんど気づかないが、学者たちが説明をほどこしても、神のみが究極のその計りがたい秘密を知っている。

私が表面上冷淡にしていたため、たじろぎ、勇気を失って、ほとんどの友人は私の悲しみに潜む謎を追究することをあきらめてしまった。友人たちは、私がただ沈黙することで及ぼした厭うべき作用を嘆きあった。実はその沈黙は小心で淡々としたおとなしいものだったが、友人たちの傷つきやすい自尊心は沈黙の底に或る種の尊大に睥睨するがごとき独立不羈を感じ取り、それを理解することも許すこともできなかったのだ。他の誰にもましてエールマンはこの耐えがたい印象を甘受していた。そして四年を隔てて私と再会したのは、体面とか義務とか慎重さとかについてのあらゆる社会通念に反して、八年間不平を言わずに繋がれていた鎖(1)を私が断ち切ったばかりの頃だった。最近取り返しのつかない不幸(2)が私の理性を鍛え直し、忍従を確かなものにしたはずだった頃のことなので、決定的な動機を何一つ私から聞かされなかったということにエールマンが驚くのも無理はなかった。家族に批判されても聞く耳を持たず、家族の意見に逆らって、ほとんど耐えがたい社会的地位に落ちてゆくほどのことだったのだから。エールマンがパリに滞在していた間中、ほとんど私は自分のことを語らなかつた。そしてわずかばかり語ったのも、一般的で余り説明にはならない言葉でだったから、私の精神状態については、わずかな兆しから、曖昧な観察を推測で補って判断するしかなかった。しかしエールマンはいつもの洞察力が、私の意に反してと言っていいくらい私に強い関心を抱いていたせいでさらに冴えて、真実にかなり近い結論に達していた。